虹

東村立 高江小学校
学校便り【虹】
2021年6月①
発行責任者 校長 宮城達也

※6月8日付：沖縄タイムスで紹介されました！

第3種郵便物認可

高江小の登り窯 復活へ

陶芸家と住民協力

2017年から使われず

【東】高江小学校のグラウンド横にあり現在は使われていない登り窯を復活させようと、読谷村から高江区に移住した陶芸家の森貴希さん(40)が、地域住民や村と協力して窯の活用に向けた取り組みを始めている。県内の小学校に登り窯があるのは高江小だけ。陶芸を通した地域活性化への期待が高まっている。(北部報道部・西倉信朗)

子どもたちの教育に生かそうと、高江小中学校(当時)に初めて窯が造られたのは1979年のこと。台風で壊れてしまったため、80年に高江中学校の美術教師だった知花博康さん(85)らが本格的な登り窯を造り直した。

火入れの際には住民らが交代でまきをくべ、陶芸家の指導を受けながら子どもからお年寄りまで集まり、地域で作品制作を楽しんだ。同区の仲嶺久美子区長は「みんなでお酒を飲みながら語り合い、火の番をするのが楽しみだった。良い作品もたくさん生まれた」と当時を振り返る。

だがその後、地域の子どもの減少とともに陶芸教室の開催も減り、2017年に高江中学校が閉校してからは一度も使われなくなっていた。

高江小学校の宮城達也校長や区民の玉城剛さん(42)らを中心に窯を復活させようという声が上がり、高江に移住することが可能で登り窯を使うことができる陶芸家探しが始まった。その際、読谷村にあるやちむんの工房で約7年半修行した後、独立して窯を造る場所を探していた森さんに声が掛かった。

森さんは「この機会は逃せない」と挑戦を決め、家族4人で4月に高江に移住。修復費用は村教育委員会が支援した。窯の修復作業や土が採れる場所を探すなど、火入れに向けて着々と準備を進める。

窯が復活すると聞いた知花さんは「懐かしいね。登り窯を使うにはたくさんの人手が必要だから、またみんなで焼きたいな」と目を細める。

玉城さんは「窯が地域住民の集まる場所になってほしい」と期待。宮城校長は「もの作りの良さに気付き、村内の小中学生のつながりができるとうれしい」と喜んだ。

森さんは8月ごろの火入れを目指しており、9月には子どもたちを対象にした陶芸教室の開催も予定している。「支援してくれた地域の皆さんに陶芸を通して少しずつ恩返しをしていきたい」と笑顔を見せた。

(上)窯を修復する森貴希さん=5月20日、東村高江(下)登り窯が使われていた当時の陶芸教室の様子=2005年、東村高江

【今月の校長講話】6/8

今月の校長講話は2部構成。一部では平和月間にちなんで、戦後76年目を迎える沖縄戦についてのお話をしました。首里城地下に日本軍の司令部がおかれていたこと、そのために当時の首里城が米軍の攻撃によって破壊されたことを説明し、追い詰められた人々が南部方面に逃げ多くの犠牲者がでたことなどを説明しました。6月28日の校外平和学習では、その足跡をたどり、首里城やひめゆり平和祈念資料館、県平和祈念公園等を訪ねて、戦争の悲惨さと平和の尊さを学ぶ計画を立てています。2部では南アフリカの人種差別政策「アパルトヘイト」と戦ったネルソン・マンデラ元大統領のお話をしました。27年もの長い間刑務所に収監された後、大統領となったマンデラが訴えた「和解と協調(復讐ではなく赦すこと・理解し合うこと)」、彼が目指した「虹の国」づくりの考え方についてお話ししました。

【ボランティア活動】6/2

児童が自分たちで地域に貢献できることを実行しようと一緒にうこと で、区長さん方と一緒に公民館周辺の草刈りや花壇の手入れ・清掃を行いました。

【今月の体育朝会】6/10

体力づくりと異学年交流を兼ねて実施している体育朝会！今月は大縄跳びに挑戦です。4人の息を合わせて20回越え達成。一年生の八満さんも上手に跳べるようになりました。

【朝の読み聞かせ】6/9

今月の朝の読み聞かせは、事務の里友子生と養護教諭の瑞慶山涼子先生の生入れ。おのんしのん発表。想像力豊かな絵本の読み聞かせ。